

大学生における複数の感情生起場面および曖昧な場面の理解と自己統制

○江頭史華¹・山本真由美²

(¹徳島大学大学院総合科学教育部臨床心理学専攻・²徳島大学大学院総合科学研究部)

問題と目的

児童は悲しみと喜びのように感情が入り混じるような場面において、それらの感情を理解することが困難である(久保, 1999)。また相手の行動の意図が敵意にも偶然にも受け取れる曖昧な状況で、相手の行動の意図を敵意的に受け取り、攻撃的な対応をするものは中学1年生で多く、それ以降年齢が上がるに伴い、そのようなものは減少する(戸田ら, 2010)。これらのことから年齢が上がるにつれて感情理解や文脈理解などの発達が進むことがわかっているが、大学生において検討された研究は少ない。

そこで本研究では、大学生に、複数の感情が入り混じる場面と曖昧な場面における、生起感情、相手の行動の意図解釈、相手への対応を自由に回答してもらい検討した。

方法

1. 調査協力者：A大学の学生45名(男性11名, 女性34名)。
2. 調査手続き：2016年9月初旬に大学の講義時間中に質問紙を配布・回収した。
3. 質問紙構成(表1)：

表1 各場面設定

場面	場面設定
場面1	Aさんは友人から誕生日にプレゼントをもらいました。友人の前でそのプレゼントを開けて見てみると、すでにAさんがもっているもので、特にAさんにとって必要なものではありませんでした。
場面2	Aさんと友人は同じ部活動に所属しています。友人は大会の1回戦で敗退して泣いています。Aさんはその大会で優勝しました。友人はAさんが優勝したことについて何も言ってきません。
場面3	Aさんは友人と一緒に受験の可否を確認しにいきました。すると、友人は合格していましたが、Aさんは不合格でした。友人は嬉しそうに笑っています。
場面4	Aさんは友人に挨拶をしましたが返事がありませんでした。
場面5	Aさんの前を友人が歩いており、友人が先に部屋に入っていきました。その後友人がドアを開けたためAさんは部屋に入れませんでした。
場面6	Aさんの友人Bさんの誕生日会に、Aさんの友人のCさんが招待されるとAさんに報告してきました。しかし、AさんはBさんの誕生日会に招待されていません。

①ポジティブ感情とネガティブな感情が入り混じる場面(場面1~3)、②相手の意図が敵意とも過失とも偶然とも受け取れるような曖昧な場面3パターン(場面4~6)を提示し、それぞれの場面での生起感情、相手の行動の意図解釈、相手への対応を自由に

記述してもらう。

4. 分析方法：自由に記述された回答を、KJ法を用いて分析を行った。分類は研究実施者が行い、その後臨床心理学専攻の大学院生2名に分類と命名が妥当か評定してもらい、評定が不一致の場合に全員で協議を行った。

結果と考察

生起感情では、場面1~6において、研究すべての場面で「嬉しい」や「怒り」などのポジティブとネガティブの2つの感情が見られた。しかし、記述された感情の種類はネガティブな感情が多くなっていった。また、すべての場面において「なんとも思わない」というニュートラルな感情もみられた。

相手の行動の意図解釈では、相手の行動の意図を「わざとやった」など敵意的に捉えるパターンと、「何か考え事をしていた」など非敵意的に捉えるパターンと「気づかなかった」など偶然と捉える3パターンに分類された(表2)。非敵意的の中には、「自分にかかる言葉も難しいだろう」など、相手視点に立った解釈もみられた。

表2. 場面解釈の3パターンの割合

	場面1	場面2	場面3	場面4	場面5	場面6
敵意	4%	18%	16%	46%	36%	60%
非敵意的	72%	80%	84%	18%	12%	33%
偶然	11%	2%	0%	36%	52%	7%

相手への対応では、「怒る」「無視する」など攻撃的に対応と、「相手を祝福する」などの非攻撃的な対応の大きく2パターンに分類された(表3)。非攻撃的な対応の中には、ただ相手の行動を「気にしないようにする」など受容するだけの対応以外に、「冗談のように伝える」など自分の意見を非攻撃的に主張するというような対応もみられた。

表3. 対応の2パターンの割合

	場面1	場面2	場面3	場面4	場面5	場面6
攻撃的	11%	3%	19%	17%	10%	33%
非攻撃的	89%	97%	81%	83%	90%	67%